

とうみみやた
富山市任海宮田遺跡
発掘調査報告書

— 携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2008

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市任海92番地1に所在する任海宮田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ北陸が行う携帯電話基地局建設工事に伴い、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査期間、出土品整理期間、調査面積（m²）、調査担当者は次のとおりである。
調査期間　現地調査　平成19年9月18日～平成19年9月27日
出土品整理　平成19年9月27日～平成20年3月31日
調査面積　45m²
調査担当者　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主任学芸員　細辻嘉門、嘱託　伊集守道
- 4 調査にあたり、谷川隆久氏にご協力を賜った。また、地元任海地区のご協力を得た。記して謝意を表します。
- 5 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆は第1章を富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主任学芸員　古川知明が、その他を細辻が行った。本書の編集は細辻が行った。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は国家座標VII系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 土層説明、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 1994年版」に掲げる。
- 3 遺構の標記は、掘立柱建物：SB、ピット：Pを用いた。
- 4 図中の網掛は、以下のとおりである。



碟



地山

須恵器・珠洲の断面



目　　次

第1章 経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の方法と成果	3
第4章 総括	7
参考文献	7
写真図版	8
報告書抄録	10

第1章 経過

第1節 調査の経緯と経過

任海宮田遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年に富山市教育委員会が実施した市内の分布調査で発見された遺跡である。その後各種開発事業に伴う試掘確認調査・発掘調査が多数実施され、飛鳥・奈良・平安・中世の大規模集落遺跡であることが明らかになっている。

平成 19 年 6 月、任海 92 番 1 において、株式会社エス・ティ・ティ・ドコモ北陸（代表取締役社長是枝義人）による携帯電話基地局新設について協議があり、同年 9 月試掘確認調査を実施した。調査の結果、建設予定地（328m²）のうち 252m²に遺跡の所在が確認された。

協議により、遺構が掘削を受ける 45m²について発掘調査を行い、残る 207m²を盛土保存することで双方の合意を得たため、協定を締結し、同年 9 月 18 日発掘調査に着手した。

発掘調査は 9 月 27 日まで実施し、中世の掘立柱建物 1 棟を確認した。出土品整理はその後引き続き平成 20 年 3 月 31 日まで実施し、本書を刊行して完了した。(古川)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

任海宮田遺跡の立地する富山平野は、富山県の中央部に位置する。北は富山湾に面し、東端は早月川扇状地に接し、西端は呉羽山丘陵に接し、南端は飛騨山地から続く丘陵に面している。

富山平野の地形は、全体に南から北へ向かって緩やかに傾斜しており、神通川とその支流が形成した扇状地の発達が顕著である。

遺跡は、富山湾から南に 14km 内陸に入った富山平野南部・富山市任海地内に所在する。

遺跡は神通川支流熊野川左岸の自然堤防上に立地し、東西約 900 m、南北約 1 km の範囲に広がる。

調査地は任海宮田遺跡のほぼ中央に位置し、調査区周辺の標高は 30 m 前後である。

第2節 歴史的環境

任海宮田遺跡を含めた周辺一帯は、各種開発による試掘確認調査・発掘調査の成果により、古代から中世にかけて大規模な集落遺跡の存在が明らかになってきている。

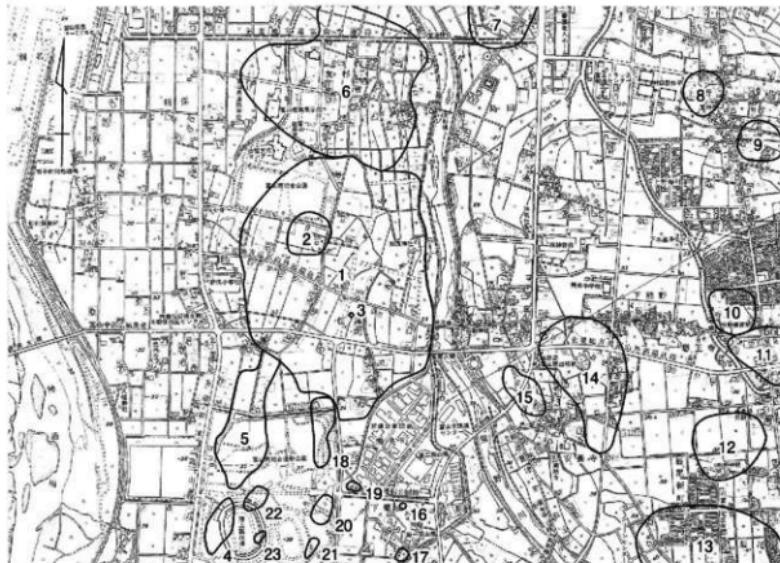
任海宮田遺跡の南にある南中田 D 遺跡では古代の竪穴住居 61 棟、中世の掘立柱建物 44 棟が確認されている（富山県埋蔵文化財センター 1991）。古倉 B 遺跡でも古代・中世の集落が確認されている（富山県埋蔵文化財センター 1992、財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2005）。北にある友杉遺跡では古代・中世の集落のほか、弥生時代後期後半の竪穴住居 1 棟が確認されている。遺跡周辺に人々が暮らし始めた時期がこの時代までさかのほることが確認できる成果である（財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2006 a）。

また、中世の文献資料として、『賀茂別雷神社文書』の中に寿永 3 年（1184 年）源頼朝が後白河法皇の院宣を受けて武士の狼藉を禁止した賀茂別雷社領 42ヶ所の中に「越中国新保御野」の記述がある。

新保御野の所在は研究者により滑川市高月や水橋新保が検討されている（橋本 1976、久保 1995）。

任海宮田遺跡内には「新保」という地区名があること、任海地区には加茂神社が祀られていることから、遺跡周辺一帯は、新保御野の比定地の一つとなっている。

江戸時代には、富山から飛騨に抜ける飛騨街道が熊野川に沿って南北に通っていた。また、現在の任海橋付近で岩木道・八尾道が分岐しており、遺跡一帯は街道が交差する交通の要衝であった。



1. 任海宮田遺跡 2. 任海池原寺跡 3. 任海三十司塚 4. 南中田D遺跡 5. 吉倉B遺跡 6. 次杉遺跡 7. 雑川遺跡
 8. 上野前田遺跡 9. 上野亀田遺跡 10. 慶王寺遺跡 11. 茅竹町遺跡 12. 宮保遺跡 13. 堀尾遺跡 14. 下野野遺跡
 15. 安堂寺遺跡 16. 堀山遺跡 17. 在寺廢寺 18. 任海遺跡 19. 任海砂田遺跡 20. 堀山椎原遺跡 21. 南中田A遺跡 22. 任海廢倉遺跡 23. 南中田C遺跡



図1 周辺の遺跡分布図(1:20000)及び調査対象地位置図(1:5000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は、最初に造成盛土・耕作土を試掘確認調査の結果をふまえながら遺物包含層上面までバッカホウにより掘削・除去した。その後、遺物包含層上面から人力による掘削を行った。

包含層掘削が完了した部分から、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は半分掘削した後、断面を写真と図面に記録し、完掘した。遺物はトータルステーションを使用して、位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図とも縮尺20分の1を基本として作成した。

カメラは35mm・プローニー(6×7)サイズを使用し、フィルムはカラーネガと白黒を使用した。

第2節 層序(図2)

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、地表面から20~30cm下まで盛土整地が行われている。それより下層については、部分的に見られる搅乱などを除き、以下の7つの層に分けることができる。今回の調査では、VII層上面で遺構の検出を行った。

I層：オリーブ黒色シルト(旧耕作土)層厚15~20cm

II層：オリーブ黒色シルト、鉄分含む(旧耕作土)層厚5~15cm

III層：オリーブ褐色砂質シルト(旧耕盤土)層厚5~15cm

IV層：暗オリーブ褐色砂質シルト(旧耕盤土)層厚5~10cm

V層：オリーブ黒色砂質土(遺物包含層)層厚0~10cm

VI層：オリーブ褐色砂質土に浅黄色細砂斑状混(遺物包含層)層厚10~15cm

VII層：浅黄色砂質シルトにVI層斑状混(地山)

第3節 遺構

掘立柱建物1棟、ピットを6基確認した。

1. 掘立柱建物(図3、写真1)

SBO1 調査区の北部分で検出した。1間×1間の継柱建物。柱間はP01-P04間が2.7m、P04-P09間が2.0m、P09-P20間が2.6m、P20-P01間が2.2mで、平面形は長方形である。建物の面積は5.5m²である。建物の長軸は、東に61°振っている。

柱穴の平面形は円形で直径は40cm前後である。断面観察では柱痕は確認できなかった。

2. ピット(図3)

P05 円形を呈する。直径0.35m、深さ0.2m。断面はU字型である。遺構埋土は3層で、自然堆積と考えられる。柱痕は確認できない。

P06 円形を呈する。直径0.25m、深さ0.1m。断面は緩やかなU字型である。遺構埋土は単層で、柱痕は確認できない。

P07 楕円形を呈する。長径0.3m、短径0.25m、深さ0.05m。断面は舟底型である。遺構埋土は3層で、自然堆積と考えられる。柱痕は確認できない。

P08 楕円形を呈する。長径0.3m、短径0.25m、深さ0.1m。断面は舟底型である。遺構埋土は単層で、柱痕は確認できない。

P10 楕円形を呈する。長径0.4m、短径0.3m、深さ0.35m。断面はU字型である。遺構埋土は単層で、柱痕は確認できない。

P18 不整形を呈する。長径0.35m、短径0.2m、深さ0.1m。断面は緩やかなU字型である。遺構埋土は単層で、柱痕は確認できない。

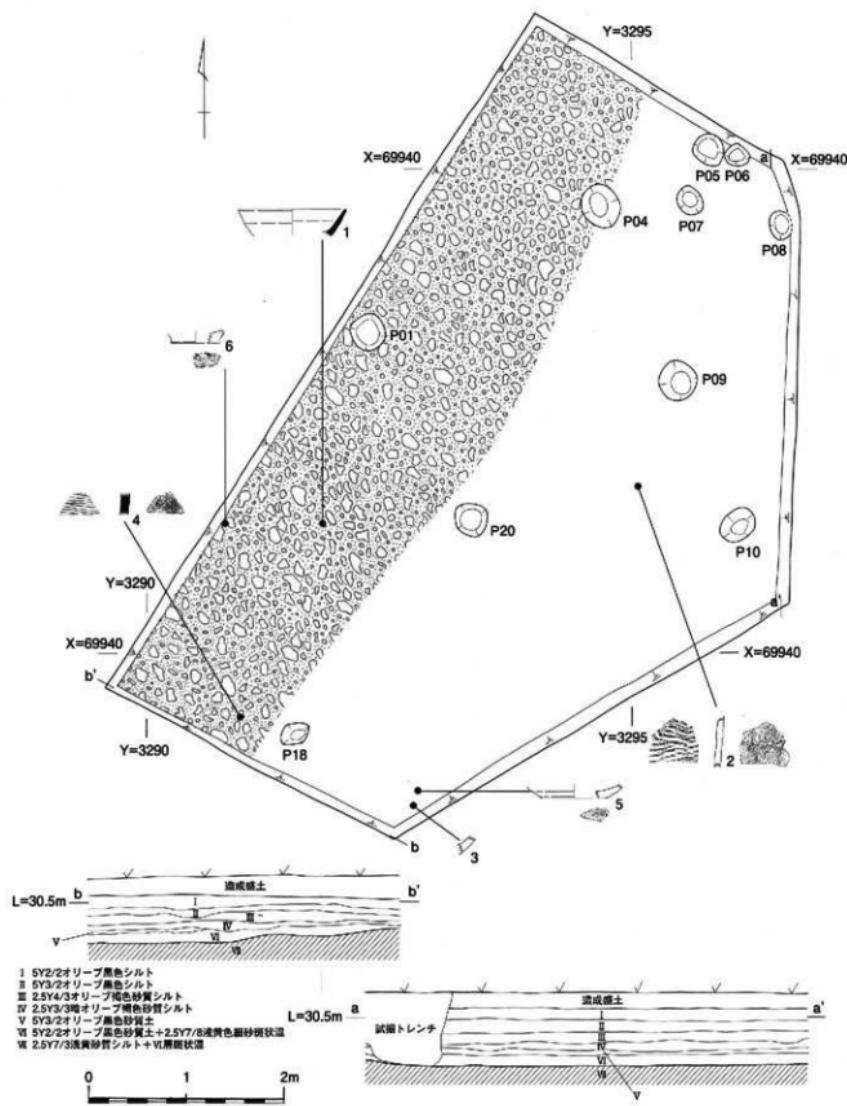


図2 調査区全体図、土層図、遺物出土地点図(1:50)、遺物実測図は1:5

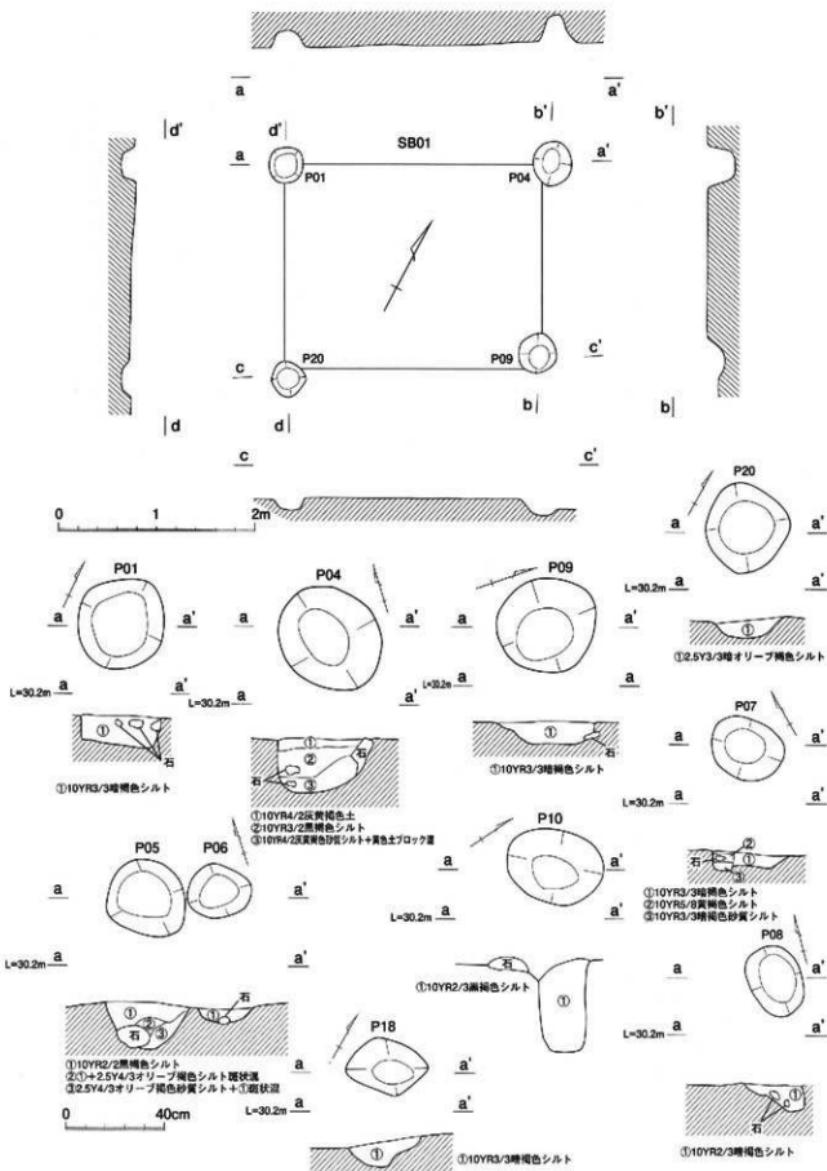


図3 遺構平面図及び断面図 (SB01は1:50、他は1:20)

第4節 遺物

遺物は須恵器、土師器、珠洲、中世土師器が収納コンテナ（60cm×40cm×10cm）に換算して1箱出土した。全て包含層からの出土である。

1. 須恵器（図4の1、写真2-5の1）

1は杯身の口縁部である。体部は斜方向へ直線的に開き、口縁端部は丸くおさめる。焼成は良好で胎土は緻密である。色調は灰白色を呈する。口径 10.8cm。器形、器高は不明である。9世紀前半。

2. 土師器（図4の2・3・5、写真2-5の2・3・5）

2は長胴甕の胴部と考えられる。外面タタキ調整である。内面はハケ調整と思われるが摩滅が激しい。焼成は良好で胎土は密である。色調は明黄褐色を呈する。器形、大きさは不明である。

3は甕の胴部と考えられる。色調は灰黄褐色を呈する。内外面ともナデを施すと思われるが、摩滅が激しい。器種、器形、大きさとも不明である。

5は碗の底部である。内面ミガキ、外面ナデを施すと思われるが、ともに摩滅が激しい。胎土は密、焼成は良好である。浅黄色を呈する。底径 6.4cm。器形、器高は不明である。古代末か。

3. 珠洲（図4の4、写真2-5の4）

壺と考えられるものが1点出土している。外面タタキ調整、焼成は良好で胎土は緻密である。暗灰色を呈する。器形、大きさは不明である。

4. 中世土師器（図4の6～7、写真2-5の6～7）

皿の底部である。全てロクロ成形で、底部外面に同軸糸切り痕を残す。器形、器高は不明である。時期は12世紀後半～13世紀代と考えられる。

6は柱状の高台を持つ。胎土は密、焼成は良好である。にぶい黄橙色を呈する。底径 5cm。

7は厚い底部をもつ。胎土は密、焼成は良好である。灰黄色を呈する。底径 6cm。

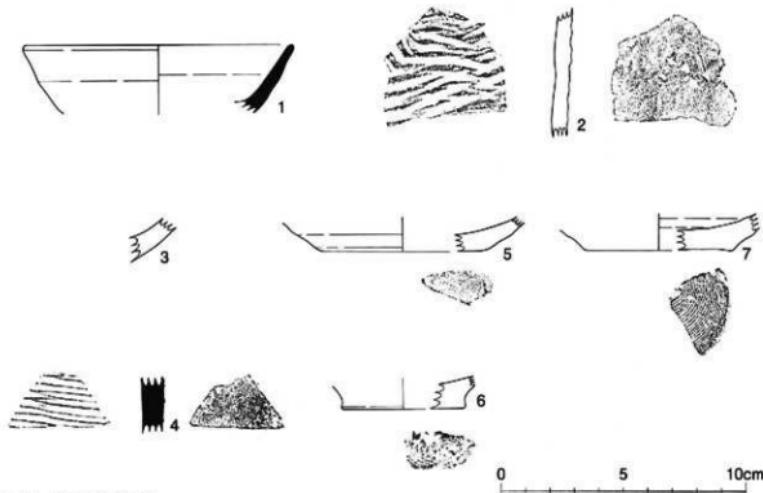


図4 出土遺物(1:2)

第4章 総括

今回の発掘調査では中世の掘立柱建物1棟と、6基のピットを確認した。

掘立柱建物は、1間×1間、面積5.5m²である。簡易な処物（作業小屋・倉庫等）が想定される。

遺物は包含層からのみ出土した。細かい破片ではあるが中世のものが多く、包含層の時期は中世と判断した。遺構からの出土遺物はないが、遺構の埋没時期は、包含層と遺構埋上が同じ土であることから中世と考えられる。

調査地の西側は疊が堆積する。ピットが疊層を切っており、中世以前の旧河道であると推測される。

平成10年の調査では、今回調査地東側で古代の堅穴住居、掘立柱建物、溝などが確認された。掘立柱建物の軸は、SB01は東に14°、SB02は東に11°振っている。今回確認した掘立柱建物と軸の方向が違うことから、別の建物であると考えられる。

任海宮田遺跡は、これまでに各種開発による試掘確認調査や発掘調査が多数実施され、古代・中世の遺構が多数確認され、石製の帯飾り、鳥型須恵器など特殊な用途の遺物が出土している（富山県埋蔵文化財センター 1996・1997・1998、富山市埋蔵文化財センター 1996・1997・1999・2000ほか、財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2006・2007）。また、墨青土器が810点以上出土しており、県内でも群を抜く出土数である（堀沢 2005）。

以上から、任海宮田遺跡は、古代から中世にかけて、中核的な機能を果たす集落が存在していたと考えられる。

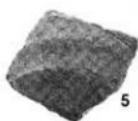
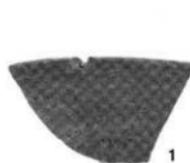
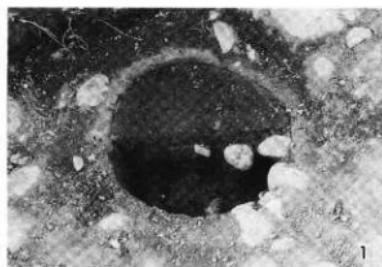
今回の調査地は、遺構、出土遺物ともわずかであるが、任海地区に広がる中世集落の中央部分を構成する遺構と理解される。

【参考文献】

- 久保尚文 1995 「上賀茂神社領越中新保御町について」『日本海文化研究所報 15号』 p4-p10 日本海文化研究所
- 財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2005 『吉倉B遺跡発掘調査報告』
- 財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2006 a 『平成17年度 埋蔵文化財年報』
- 財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2006 b 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 財团法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 『富山県富山市 南中田D遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1994 『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告(4) 古倉B遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996 『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997 『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998 『富山県富山市 任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 富山市教育委員会 1996 『富山市任海宮田遺跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1997 『富山市内遺跡発掘調査概要 I 吉岡遺跡 任海宮田遺跡 水橋二杉遺跡』
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999 『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 2000 『富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 橋本芳雄 1976 『賀茂社領新保御町』『富山県史 通史編 I 原始・古代』 p626-p628 富山県
北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸』
- 堀沢祐一 2005 『越中国における律令祭祀具と墨青土器について』『大境 第25号 渥美先生追悼号』 p133-p142 富山考古学会



写真1 上=調査区完掘（南から） 下=SBO1完掘（東から）



5

写真2 1. P01断面（東から） 2. P04断面（南から） 3. P09断面（東から）
4. P20断面（南から） 5. 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とやましとうみみやたいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書							
副書名	携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	28							
編著者名	古川知明 細辻嘉門							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
編集機関住所	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
任海宮田 遺跡	富山市任海地内	市町村	遺跡 番号	36度 37分 50秒	137度 12分 08秒	20070918～ 20070927	45	携帯電話 基地局 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
任海宮田 遺跡	集落	奈良・平安 中世	掘立柱建物1棟 ・ピット6基			須恵器・土師器・珠洲・ 中世土師器		
要約	中世の集落を確認した。検出した遺構には、掘立柱建物1棟、ピット6基がある。掘立柱建物の規模は1間×1間である。遺構埋土が包含層と同じ土のため、建物の時期は、中世と考えられる。 出土遺物は、須恵器、土師器、珠洲、中世土師器があり、古代から中世にわたる。中世土師器の特徴から12世紀後半から13世紀代が主要な時期であると考えられる。							

富山市埋蔵文化財調査報告 28

とうみみやた
富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書
—携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

発行日 2008(平成20)年3月31日

発行機関 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター

〒 930-0091

富山市愛宕町1丁目2-24

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 株式会社なかたに印刷

